

下
総
龍
角
寺
RYUAKUJI

早稲田文化芸術週間 2022

下総龍角寺展関連シンポジウム

下総龍角寺再考
—最新の発掘調査から—



2022年10月

早稲田大学會津八一記念博物館／早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所／早稲田大学奈良文化研究所

下総龍角寺再考

—最新の発掘成果から—

目次

目次・例言・シンポジウムチラシ・企画展チラシ・執筆者一覧

第1部 総論—龍角寺研究の現状と論点の整理—

- 01 龍角寺の調査研究史とⅡ期調査の成果 8
(城倉 正祥：早稲田大学文学学術院)

第2部 龍角寺前史—龍角寺古墳群の調査研究—

- 02 公津原古墳群と龍角寺古墳群 10
(石井 友菜：千葉県立中央博物館大多喜城分館)
- 03 龍角寺古墳群における石室の三次元計測 12
(吳 心 怡：早稲田大学文学学術院)
- 04 龍角寺建立前夜—7世紀の龍角寺古墳群— 14
(白井 久美子：千葉県立房総のむら)

第3部 龍角寺と関連遺跡の調査研究

- 05 龍角寺出土土器の年代—印旛郡の紀年銘墨書土器との比較を中心に— 16
(高橋 亘・横溝 優：早稲田大学大学院文学研究科／高林 奎史・梶原 悠渡：早稲田大学文学部)
- 06 龍角寺出土の瓦—一枚づくり平瓦の検討を中心に— 18
(谷川 遼：早稲田大学會津八一記念博物館)
- 07 龍角寺の近世建築 20
(小岩 正樹：早稲田大学理工学術院)

第4部 龍角寺の仏像・埴仏と保存活用

- 08 龍角寺薬師如来像の像容と制作時期 22
(川瀬 由照：早稲田大学文学学術院)
- 09 龍角寺出土埴仏の位置付け 24
(肥田 路美：早稲田大学文学学術院)
- 10 龍角寺における保存活用の現状と今後の計画 26
(水野 智亮：栄町教育委員会)

第5部 総括—成果と今後の課題—

- 11 地域史研究と龍角寺 28
(川尻 秋生：早稲田大学文学学術院)

奥付

例言

1. 本書は、早稲田大学會津八一記念博物館、早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所、早稲田大学奈良文化研究所が共催した、早稲田文化芸術週間 2022 下総龍角寺展関連シンポジウム『下総龍角寺再考—最新の発掘調査から—』（2022 年 10 月 16 日／早稲田大学小野記念講堂）の予稿集である。
2. 本書は、P7 の執筆者一覧に記載した発表者の原稿に基づいて、城倉正祥が Adobe Indesign を用いて編集した。また、表紙デザインは、高橋亘が担当した。
3. 本書は、当日配布用としてモノクロ予稿集を 250 部印刷した。印刷費に関しては、後援の早稲田大学総合研究機構のシンポジウム助成金から支出した。
4. 本書のオールカラーデジタル PDF は、シンポジウム終了後に、早稲田大学リポジトリ、および全国遺跡報告総覧で公開を予定している。

下総
龍角寺
RYUAKUJI

早稲田文化芸術週間 2022

下総龍角寺展関連シンポジウム

下総龍角寺再考
—最新の発掘調査から—

2022年10月16日(日)

早稲田大学小野記念講堂

無料

先着120名

事前申込制



詳しくはWEBサイトにて
ご確認ください。



共催：早稲田大学會津八一記念博物館／早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所／早稲田大学奈良文化研究所
後援：早稲田大学総合研究機構

シンポジウムチラシ（表面）

プログラム

開会のあいさつ (10:00 ~ 10:05)

趣旨説明 (10:05 ~ 10:10)

第1部 総論 – 龍角寺研究の現状と論点の整理 – (10:10 ~ 10:40)

龍角寺の調査研究史とⅡ期調査の成果

(城倉正祥：早稲田大学文学学術院)

第2部 龍角寺前史 – 龍角寺古墳群の調査研究 – (10:40 ~ 11:40)

公津原古墳群と龍角寺古墳群

(石井友菜：千葉県立中央博物館大多喜城分館)

龍角寺古墳群における石室の三次元計測

(呉 心怡：早稲田大学文学学術院)

龍角寺建立前夜 – 7世紀の龍角寺古墳群 –

(白井久美子：千葉県立房総のむら)

第3部 龍角寺と関連遺跡の調査研究 (13:00 ~ 14:00)

龍角寺出土土器の年代 – 印旛郡の紀年銘墨書土器との比較を中心に –

(高橋 亘・横溝 優：早稲田大学大学院文学研究科／高林奎史・梶原悠渡：早稲田大学文学部)

龍角寺出土の瓦 – 一枚づくり平瓦の検討を中心に –

(谷川 遼：早稲田大学會津八一記念博物館)

龍角寺の近世建築

(小岩正樹：早稲田大学理工学術院)

第4部 龍角寺の仏像・埴仏と保存活用 (14:00 ~ 15:00)

龍角寺薬師如来像の像容と制作時期

(川瀬由照：早稲田大学文学学術院)

龍角寺出土埴仏の位置づけ

(肥田路美：早稲田大学文学学術院)

龍角寺における保存活用の現状と今後の計画

(水野智亮：栄町教育委員会)

第5部 総括 – 成果と今後の課題 – (15:00 ~ 15:30)

地域史研究と龍角寺

(川尻秋生：早稲田大学文学学術院)

閉会のあいさつ (15:30 ~ 15:35)



下総龍角寺展 開催中！

早稲田大学
會津八一記念博物館
AIZU MUSEUM, WASEDA UNIVERSITY
2階 グランド ギャラリー
1階 富岡重憲コレクション展示室

大隈記念タワー (26号館)
10階 125記念室
考古学・民族資料常設展示 同時開催中！

シンポジウムチラシ (裏面)

早稲田大学
會津八一記念博物館
AIZU MUSEUM, WASEDA UNIVERSITY



入館
無料

2022年
9月20日(火) ↓ 11月15日(火)
10時～17時 (入館は16時30分まで)
休館日：水曜・祝日

下総
龍

角寺

RYUKAKUJI



下総国埴生庄ニ龍角寺アリ、
是レ龍女建立ノ寺ナリ。



板碑
(栄町所蔵)

軒瓦
(栄町所蔵)

埴仏
(栄町所蔵)

国指定重要文化財
銅造薬師如来坐像
(龍角寺所蔵)
※写真提供 奈良国立博物館

「元明天皇ノ御宇、和銅ニ天陽春、 天ノ龍女ガ化来シ当寺ヲ建立ス (龍角寺大縁起より)」

千葉県印旛郡栄町に所在し、7世紀の創建から今日まで法灯を守り続ける龍角寺は、龍女によって建立されたと伝えられる、東国でも屈指の古刹です。

龍角寺のご本尊である「銅造薬師如来坐像」は切れ長の目元、ふくよかな顔つきが特徴的な金銅仏で、国指定重要文化財に登録されています。かつての伽藍から出土した瓦は、蘇我倉山田石川麻呂が発願した山田寺で使用した瓦を祖型としており、龍角寺が都の権力者と深い繋がりがあったことを想起させます。また、龍角寺の周辺には、114基の古墳からなる龍角寺古墳群、最後の前方後円墳といわれる浅間山古墳、日本最大級の方墳である岩屋古墳、埴生郡家と考えられる大畑遺跡などの重要な遺跡があり、この地域が古代において稀有な場所であったことは想像に難くありません。

早稲田大学では、有史時代を専門とした滝口宏教授による1940年代の発掘以降、継続して当該地域の調査を行っています。特に2014年度以降の龍角寺調査では、東国では4例目となる埴仏(范で製作した土製の仏像)や、祭祀を行った後に廃棄された大量の灯明皿が出土するなど、多くの成果が得られました。

本展覧会は、国指定重要文化財である「銅造薬師如来坐像」の東京初公開、早稲田大学が実施した龍角寺に関する研究成果の初公開、「龍角寺」をテーマとした初の総合的な企画であるなど、「初」づくしです。東国でも有数の大寺院であった龍角寺の歴史を、最新の研究成果を踏まえ、様々な分野の観点からご紹介します。

2022年

9月20日(火) → 11月15日(火)

早稲田大学會津八一記念博物館
2階 グランド ギャラリー / 1階 富岡重憲コレクション展示室

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
[TEL] 03-5286-3835 [FAX] 03-5286-1812
[URL] <https://www.waseda.jp/culture/aizu-museum/>
※ご来館の際には、ウェブサイトにて最新の開館日程・時間をご確認ください。

大隈記念タワー (26号館) 10階 125記念室
考古学・民族資料常設展示 同時開催中!



下総
龍角寺
RYUKAKUJI

下総龍角寺関連シンポジウム

『下総龍角寺再考 - 最新の発掘調査から - 』

2022年10月16日(日) 小野記念講堂
※詳細はウェブサイトにてご確認ください。

執筆者一覧

城倉 正祥

早稲田大学文学学術院／教授

石井 友菜

千葉県立中央博物館大多喜城分館／研究員

呉 心 怡

早稲田大学文学学術院／助手

白井 久美子

千葉県立房総のむら／主任上席研究員

高橋 亘

早稲田大学大学院文学研究科／修士課程

横溝 優

早稲田大学大学院文学研究科／修士課程

高林 奎史

早稲田大学文学部／4年

梶原 悠渡

早稲田大学文学部／3年

谷川 遼

早稲田大学會津八一記念博物館／助手

小岩 正樹

早稲田大学理工学術院／准教授

川瀬 由照

早稲田大学文学学術院／教授

肥田 路美

早稲田大学文学学術院／教授

水野 智亮

栄町教育委員会生涯学習課文化財班／副主査

川尻 秋生

早稲田大学文学学術院／教授

龍角寺の調査研究史とⅡ期調査の成果

01

城倉 正祥

早稲田大学文学学術院

はじめに

早稲田大学は、龍角寺を継続調査してきた。1947・48・71・76年をⅠ期、2014年以降をⅡ期調査と呼称する。Ⅱ期は、2014年3月の測量・GPR（1次）調査、2014年4月の補足（2次）調査、2015年2～3月の発掘（3次）調査、を実施した。以下、現在までの成果を整理する。

1. 龍角寺の調査研究史

早稲田大学の滝口宏は、1947・48年に龍角寺を発掘して回廊の痕跡を追求し、奈良時代前期創建の法起寺式伽藍を想定した（滝口1949）。1971年には、金堂・塔・塔北方建物を調査した。現存する金堂基壇の下層で創建基壇を検出すると同時に、塔基壇の規模を確定した（千葉県教育委員会1971）。1976年には、金堂北（西）側を調査したが、講堂は検出できなかった。

1988年には、千葉県が寺域の範囲確認調査を実施した（千葉県教育委員会1989）。

1989年には、奉安殿南建物、旧二荒神社の造替に伴う発掘を多宇邦雄が実施した。旧二荒神社の発掘では、調査区東側でロームを掘り込んで形成された版築基壇の西端を南北10m分検出し、講堂の存在が指摘された（多宇1998）。多宇は仁王門も創建期の門址と考えたようだが、この点は岡本東三、山路直充も南門・金堂・講堂が南北に並ぶ伽藍を想定し、「変則的伽藍」（岡本1993p20）、「法起寺式と呼ばれる配置とは異なる」（山路2013p141）と指摘している。

2003年には、栄町が境内東側で寺域の広がりを確認し（栄町教育委員会2005）、2005年には、千葉県が鐘楼の北東を発掘して近世以降の建物

跡を検出した（千葉県教育振興財団2009）。

調査史を整理すると、滝口が想定した「法起寺式」から、岡本・多宇・山路が想定する「南門（仁王門の位置）・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍配置」へと認識が変化した点が見える。近年の研究では、全国の法起寺式伽藍を集成した貞清世里が、典型的な法起寺式をA類、金堂・講堂が南北に並ぶタイプをB類としており、上記二者も法起寺式の範疇で理解できる（貞清2020a）。さらに、金堂が東面する観世音寺式が列島東西南北端に位置する鎮護国家的伽藍であるのに対して、法起寺式は在地仏教の基盤として普遍的に伝播した点が指摘されるなど（貞清2020b）、伽藍配置の研究も新しい段階に進みつつある。現存遺構からの判断には限界もあるが、創建時の龍角寺の伽藍配置を総合的に理解するための調査が必要である。

なお、滝口が想定した典型的な法起寺式A類、岡本らが想定したB類に対して、貞清は龍角寺を講堂がないC類とするが、講堂の有無・位置は現段階では確定できていない。厳密に言えば、創建金堂の向きも不明で、観世音寺式の可能性も残る。博仏で関係性が想定される結城廃寺（結城市教育委員会1999）の存在からすれば、法起寺式伽藍である可能性は高いと考えるが、龍角寺の歴史性を考究する上で、創建期の伽藍配置の追及は最優先課題といえる。

2. 測量・GPR（Ⅱ期1・2次）調査

境内の現況把握のため、測量・地中レーダー（GPR）探査を実施した（城倉2015）。1932年の「龍角寺境内略図」（廣岡1933）、1971・88年の測量

図（千葉県教育委員会1971・1989）より詳細な10cm等高線図を作成し、金堂・塔・鐘楼・龍神宮・仁王門の礎石も実測した。また、各遺構毎に、GPR・磁気探査も行った。

測量・GPR調査によって、金堂・塔が東西に並び、その中間北側の龍神宮跡周辺に講堂と想定される大きな反応を確認した（「法起寺式A類か？」）。また、金堂北側・西側の現地形が、中心伽藍を圍繞する創建期の回廊の可能性が高い点も確認した。さらに、龍角寺境内の遺構が北で西側に傾く創建期の主軸から、近世にかけて徐々に真北に変遷した点も明らかになった。

3. 発掘（Ⅱ期3次）調査

金堂北側・西側の残存地形が、回廊かどうかを確認するため、北側に第1トレンチ、西側に第2トレンチを設定した（城倉ほか2017a）。

第1トレンチでは、北回廊の基壇と思われる盛土遺構（SM1511）を確認し、その下層で版築（SM1512）も検出した。基壇上では、直径1.7m・深さ1.9mの中世土坑（SK1508）を検出し、土坑内から常滑甕・宋明銭・板碑・宝篋印塔が出土した。基壇遺構の北側では、8世紀末頃の廃棄土坑（SK1501）を検出した。土坑内からは灯明皿として使用された大量の土師器・須恵器坏、瓦、勾玉、埴仏（城倉ほか2017b）が出土した。

第2トレンチでは、西側住職墓の造成に伴う中近世の盛土（SM1522）を確認し、その下層から創建期の軸線と一致する南北溝（SD1521）を検出した。南北溝は、古代の回廊基壇からの流土層を切り込んでおり、掘削後に人工的に埋め戻され、盛土された点を確認できた。トレンチ西端の下層からは、6世紀前半代の土器を伴う竪穴住居（SI1520）も検出した。

以上、金堂北・西側には中心伽藍を圍繞する回廊が存在した可能性が高い。金堂北側では、創建期の重弧文軒平瓦よりも新しい葡萄唐草文軒平瓦が採集できる点が知られていたが、第1トレンチ内でも出土し、回廊（講堂）の造営が奈良時代前半まで下がる点が想定できた。また、北回廊と想定される基壇の北側で検出したSK1501の廃棄年代が8世紀末頃と想定できる

点、二荒神社北側の谷地で火災による被熱痕のある瓦が多く散布する点（服部1932）も考慮すると、8世紀末段階では回廊（講堂）が既に機能していなかった可能性も考えられる。

なお、第1トレンチの基壇状遺構を講堂の一部と考える説も完全には排除できないが、龍神宮部分で検出した大きなGPR反応を講堂と考えるのが現状では最も整合的な理解である。

おわりに

Ⅱ期調査で、創建期伽藍の様相と中世～近世の境内の変遷が明らかになってきた。一方、未解決の課題も山積している。当面は北回廊の構造把握と講堂の位置特定が優先課題である。

引用文献

- 岡本東三1993「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について」『千葉史学』22
- 栄町教育委員会2005『栄町埋蔵文化財集報—平成15年度—』
- 貞清世里2020a「法起寺式伽藍配置をとる古代寺院の集成」『西南学院大学博物館研究紀要』8
- 貞清世里2020b『古代寺院伽藍配置の意義—観世音式・法起寺式伽藍配置をとる寺院とその展開—』西南学院大学博士学位請求論文
- 城倉正祥2015「下総龍角寺の測量・GPR（Ⅱ期1・2次）調査とその意義」『仏教文明の転回と表現』勉誠社
- 城倉正祥ほか2017a「下総龍角寺の発掘（Ⅱ期3次）調査—遺構編—」『プロジェクト研究』12
- 城倉正祥ほか2017b「下総龍角寺（Ⅱ期3次調査）出土の埴仏」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62
- 多宇邦雄1998「龍角寺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3（奈良・平安時代）』千葉県
- 滝口宏1949「下総龍角寺址調査」『史観』32
- 千葉県教育委員会1971『下総龍角寺調査報告書』
- 千葉県教育委員会1989『栄町龍角寺確認調査報告書』
- 千葉県教育振興財団2009『栄町龍角寺跡』
- 服部勝吉1932「龍角寺塔心礎と古瓦」『寶雲』4
- 廣岡城泉1933「下総國龍角寺」『新更』4-1
- 山路直充2013「龍角寺創建の年代」『古墳から寺院へ』六一書房
- 結城市教育委員会1999『茨城県結城市結城廃寺』

石井 友菜

千葉県立中央博物館大多喜城分館

はじめに

印旛沼東岸に展開する千葉県下有数の大規模古墳群：公津原古墳群・龍角寺古墳群の動態は、下総龍角寺の造営に至るまでの前史として重要な意義をもつ。本発表では、とくに浅間山古墳造営以前における両古墳群の概要、およびこれまでの研究での論点と課題、近年の調査・研究からみた今後の展望について述べる。

1. 古墳群の概要

公津原古墳群は、江川と小橋川に挟まれた洪積台地上に所在し、計 128 基の古墳が確認されている。八代台古墳群、天王・船塚古墳群、瓢塚古墳群の三支群から構成され、4 世紀前半から 7 世紀にかけて造営されたと考えられる。中でも天王・船塚古墳群中には、群中最大の船塚古墳（墳丘長 86m）、前方後円墳の石塚古墳（墳丘長 35m）、天王塚古墳（墳丘長 63m）など 6 世紀代と目される大型古墳がある。

龍角寺古墳群は、印旛沼北東岸の台地上に所在し、計 115 基の古墳が確認されている。6・7 世紀を中心に造営されたと考えられ、発掘調査によって年代の明らかな 6 世紀代の古墳としては 101 号墳（墳丘長 25m）、112 号墳（墳丘長 26.5m）があり、7 世紀になって大型前方後円墳の浅間山古墳（墳丘長 78m）、列島最大級の方墳・岩屋古墳（一辺 78m）が造営された。

2. 両古墳群をめぐる論点

ともに「印波国造」の勢力基盤として並び称される一方、埴輪（深澤ほか 1994）や大型古墳の埴形（田中 1975）、埋葬施設（永沼 1992）

など様々な視点からの研究において、両古墳群の間には差異が指摘されている。最も注目されるのは、隆盛時期の差異である。公津原古墳群において 6 世紀前半を中心に大型古墳が造営されたのに対し、龍角寺古墳群は 6 世紀後半から古墳数を増し、7 世紀に浅間山古墳、岩屋古墳など卓越した規模の古墳が登場し、両古墳群間の優位性が逆転する。こうした隆盛時期の差異をもとに、印波国造職の交代（杉山 1982・川尻 2003）が論じられた。また甘粕健は、両古墳群にみられる差異をもとに「自然成長的な形成を思わせる」公津原古墳群と「人工的な色彩の強い」龍角寺古墳群と対比し、龍角寺古墳群を「弱小な在地勢力に挺入れをして大和政権が組織した軍事集団」と捉えた（甘粕 1998）。このように、龍角寺の造営と、それに関与したと考えられる 7 世紀の大型古墳の系譜や被葬者像を追求する上で、公津原古墳群・龍角寺古墳群の形成の契機や変遷過程、および両古墳群の差異をどのように捉えるかが論点となっている。

3. 両古墳群の研究における課題

両古墳群の研究におけるネックは、発掘調査によって副葬品が明らかな例が少なく、個々の古墳の年代推定、および古墳群の詳細な変遷過程の復原が困難なことにある。

公津原古墳群では、群中において検出された埴輪生産遺跡が船塚古墳へ埴輪を供給したことが確かめられており（深澤ほか 1994・小橋 2010）、6 世紀初頭～中葉の年代が想定されている。しかし、船塚古墳の埴形については前方後方墳・長方墳・前方後円墳と様々な見解があ

り、歴史的な位置づけが難しい。石塚古墳・天王塚古墳との前後関係についても見解が分かれており、群内における大型古墳の終焉については不明瞭な点が多い（千葉県教育振興財団・房総のむら 2009）。

一方、龍角寺古墳群中には浅間山古墳と同じ墳丘企画とされる前方後円墳があり（甘粕 1964・千葉県史料研究財団 2002）、浅間山古墳の系譜を考える上で重要だが、詳細な年代決定、古墳間の前後関係の決定が困難である。

6世紀代における両古墳群の動態、そして7世紀代の古墳への系譜を考える上で、上記のような資料的制約をどのように克服し、各古墳を歴史的に位置づけるかが課題となる。

4. 近年の調査・研究から見た今後の展望

龍角寺古墳群では、50号墳（墳丘長46m）の測量・地中レーダー探査が行われている（城倉・青笹 2015）。調査の結果、浅間山古墳との外形の共通性、および埋葬施設が箱式石棺である可能性が明らかになった。今後、龍角寺古墳群内の中小規模墳や、先行研究で類似性が示された群馬・栃木県域の古墳との比較から、浅間山古墳の系譜が明らかになる可能性がある。

公津原古墳群では、船塚古墳に埴輪を供給した生産遺跡で双脚人物が確認され、船塚古墳の長方形二重周溝という特徴とあわせ、武社地域との交流が古墳群の拡大の契機となった可能性が指摘されている（白井 2020）。

また近年、両古墳群の周辺地域において古墳の発掘例が増加している。こうした発掘の成果から、印旛沼を含む香取海周辺域における埴輪や箱式石棺の墓制への導入背景に、新たな権力集団の台頭が指摘されており（根本 2011）、公津原古墳群・龍角寺古墳群形成の契機として注目される。発掘調査の進展により、古墳群の形成の契機を、周辺地域の動態とあわせて考究できる状況になりつつある。

以上のように、浅間山古墳・岩屋古墳と周辺古墳との系譜関係の解明、他地域にみられる同時代の古墳との比較、古墳群形成の契機の追求といったアプローチにより、龍角寺造営に至る

までの過程を、より詳細に明らかにできる可能性がある。

おわりに

公津原古墳群・龍角寺古墳群の調査・研究は、東国における古墳の終焉、そして寺院の成立という古代史上の画期を考究する上で重要な情報を提供してきた。近年は、良好に保存されてきた古墳群を舞台に三次元測量や地中レーダー探査などの非破壊調査が進められており、これまで蓄積されてきた緻密な研究成果との照合による、新たな研究の展開が期待される。

引用文献

- 甘粕 健 1964 「前方後円墳の性格に関する一考察」『日本考古学の諸問題』河出書房新社
- 甘粕 健 1998 「龍角寺古墳群と下総の豪族」『龍角寺古墳群からみた古代の東国』千葉県史料研究財団
- 川尻秋生 2003 「大壬部直と印波国造」『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 小橋健司 2010 「船塚古墳と公津原埴輪生産遺跡」『房総の考古学』六一書房
- 城倉正祥・青笹基史 2015 「千葉県栄町龍角寺50号墳のデジタル三次元測量・GPR調査」『WASEDA RILAS JOURNAL』3
- 白井久美子 2020 「「印波」龍角寺古墳群とその時代」『千葉史学』76
- 杉山晋作 1982 「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例—公津原古墳群とその近隣—」『国立歴史民俗博物館研究報告』1
- 田中新史 1975 「前方後方墳の終焉」『古墳時代研究Ⅱ』古墳時代研究会
- 千葉県教育振興財団・房総のむら 2009 『龍女建立—龍角寺古墳群と龍角寺—』
- 千葉県史料研究財団 2002 『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県
- 永沼律朗 1992 「印旛沼周辺の終末期古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
- 根本岳史 2011 『船形手黒1号墳』財団法人印旛郡市文化財センター
- 深澤克友ほか 1994 『千葉県教育振興財団研究紀要15 生産遺跡の研究4—埴輪—』千葉県教育振興財団

呉 心 怡

早稲田大学文学学術院

はじめに

龍角寺古墳群は115基の古墳（円墳72基、前方後円墳37基、方墳6基）で構成されており、5基が主体部に横穴式石室を持つ。早稲田大学は1947年から龍角寺古墳群の調査を行っており、近年はデジタル技術を活用した墳丘の測量・GPR調査、および石室の三次元計測調査を継続的に実施している。本発表は古墳群内の石室を対象に実施した調査の概要について整理する。

1. 龍角寺古墳群の横穴式石室

龍角寺古墳群内で埋葬主体部が判明している古墳は少なく、確認されている横穴式石室は浅間山古墳、岩屋古墳の2つの石室、104号墳、みそ岩屋古墳の5基のみである。最後の前方後円墳といわれる浅間山古墳が雲母片岩の板石組横穴式石室であるのに対し、後続する方墳である残り4基はいずれも「貝化石（印西市周辺の貝層から切り出された貝を大量に含む軟質石材）」を主に使用して構築されている。なお、浅間山古墳に先行する石室は発見されておらず、緑泥片岩や凝灰岩、雲母片岩の箱式石棺が数基、報告されている。

以上から、貝化石の石室は浅間山古墳以降に築造された古墳に、新たに導入されたものだといえる。また龍角寺古墳群を含む印西市周辺には貝化石の石室が9基分布するが、墳丘のかたちが明瞭な5基のうち4基は方墳となっており（永沼1992）、方墳の導入に合わせて新たに採用されたと推測される。方墳と貝化石石室は地域における古墳時代の終末から古代への移行の様相を考えるうえで重要な遺構である。

2. 各石室の構造—三次元計測の成果から—

岩屋古墳（西石室）、104号墳、みそ岩屋古墳の石室は古くから開口しており、遺物が残されていない。そのため、石室の構造や構築技術から系譜関係を明らかにするべく、三次元情報を取得し、図面の作成等を行った。調査手法としては、SfM/MVSによる記録を基本としつつ、岩屋古墳とみそ岩屋古墳石室については、3Dスキャナーを使用した計測も実施した。

岩屋古墳西石室とみそ岩屋古墳は共に扁平な切石に加工された貝化石を積み上げて構築されている。岩屋古墳西石室は奥壁に大型石材を2石配置し、側壁は1石目にあたる141cmの高さまで垂直に積んだ後、持ち送り技法で内側に迫り出しながら台形の天井を作り上げている（図1）。みそ岩屋古墳は奥壁に一枚岩を使用しており、両側壁の持ち送りは緩やかなドーム状となっている（図2）。一方、104号墳で使用される石材はより方形に近い加工をされている。奥壁は切組み技法を使用して複数の石材を組み合わせて構築している（図3）。

なお、川村はそれぞれの展開図から、使用尺度を算出し、岩屋古墳西石室は1尺35cm、みそ岩屋古墳と104号墳は1尺30cmの尺度の使用を想定し、各石室の構築過程を復元したうえで、浅間山古墳、および龍角寺古墳群以外の貝化石石室との比較を行った（川村2020）。

3. 墳丘と石室の関係性—みそ岩屋古墳—

石室単体での分析に加えて、三次元情報を利用して、墳丘と石室の立体的な関係性について分析を行うために、既に石室の計測を行ってい

たみそ岩屋古墳について、2021年度に墳丘の測量・地中レーダー探査を実施し、墳丘のデータを追加取得した（呉ほか 2022）。

調査により、みそ岩屋古墳は一辺約 38m の三段築成の方墳であり、二重の周溝を持つ可能性が高いことが判明した。また南東に下がる傾斜地に築造されたために、墳丘全体が傾斜しており、北西側の周溝と南東側の周溝の底面にあたる位置の比高は約 2m あることも分かった。

石室は墳丘の下面テラスに開口しており、南東に向いている。現状では開口部付近（羨道部前面）の高さより、玄室床面は約 80cm 低くなっている。なお、玄室はほぼ水平に造られている。

おわりに

貝化石石室をもつ古墳は、近隣に所在する龍角寺や郡衙関連遺跡などとともに、古墳時代終末期から古代への移り替わる時期の様相を把握できる遺構であり、石室の構築技術や構造についての細かい分析に基づいて、各古墳を位置付けていく必要がある。

現在、龍角寺古墳群内の貝化石石室のデータが蓄積されつつあり、今後は墳丘との位置関係を含めた検討や、上福田古墳群など周辺古墳の石室の調査も進める必要がある。また、貝化石石室とは異なる浅間山古墳石室（千葉県史料研究財団編 1998）の系譜も検討課題である。

引用文献

- 川村悠太ほか 2019 「龍角寺古墳群横穴式石室の三次元計測－龍角寺岩屋古墳西石室・みそ岩屋古墳の計測－」『溯航』 37
- 川村悠太 2020 「7世紀印波における横穴式石室の考古学的研究」『WASEDA RILAS JOURNAL』 7
- 呉心怡ほか 2020 「龍角寺 104 号墳横穴式石室の 3 次元計測調査」『溯航』 38
- 呉心怡ほか 2022 「みそ岩屋古墳の測量・GPR 調査」『WASEDA RILAS JOURNAL』 10
- 千葉県史料研究財団編 1998 『千葉県の歴史 資料編 考古 2（弥生・古墳時代）』 千葉県
- 永沼律朗 1992 「印旛沼周辺の終末期古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』 44



図 1 岩屋古墳の西石室 (S=1/100)
(川村ほか 2019・付図 3)



図 2 みそ岩屋古墳の石室 (S=1/100)
(川村ほか 2019・付図 6)



図 3 104 号墳の石室 (S=1/100)
(呉ほか 2020・付図 1)

白井 久美子

千葉県立房総のむら

1. 前方後円墳から方墳へ

龍角寺古墳群は、南に隣接する公津原古墳群とともに古代下総国の中央部に栄えた「印波」の有力豪族の古墳群だが、龍角寺古墳群が頭角を現すのは、豪族の墓が前方後円墳から方墳へ変わる7世紀初めの頃であった。飛鳥に宮殿が置かれた「飛鳥時代」前期、国を挙げて中国隋・唐王朝の律令制度にならった新たな体制に転換する時代にあたる。また、異国の宗教であった仏教を本格的に取り入れた時期でもあった。

龍角寺古墳群では、最後の大型前方後円墳・浅間山古墳に次いで、列島最大級の方墳・岩屋古墳が築かれる。これらの被葬者は、印波の首長として地方豪族の頂点に上りつめ、「印波国造」職を手中にしたのであろう。しかし、岩屋古墳には副葬品が残されていないため、浅間山古墳にその手がかりを求めることになる。浅間山古墳の副葬品には、古墳時代の威信財に替わる飛鳥時代の金工品が加わり、古墳時代的な価値観の変換する様子を垣間見ることができる。

一つは、金銅製の道上型毛彫馬具で、飛鳥時代に出現して消えた、まさにこの時代を表象する飾り馬具である。7世紀初頭から後葉の限られた期間に用いられた威信財ともいえる。前方後円墳の終焉と同時に、6世紀に盛行した鉄地金銅装馬具も権威の象徴としての役割を終えている。金銅製毛彫馬具は、遣隋使・遣唐使によって伝えられた新たな馬装を反映して、革帯を飾る円形や方形の金具が主体で、前代に珍重された大型の鉄地金銅装馬具とは明らかに異なる。これらの飾り馬具に刻まれた文様は、飛鳥の仏教美術に用いられた透かし彫文様と毛彫文

様で、猪目文・光芒文・芝草文などが描かれる。

6世紀以降の馬具製作には、鞍作りと仏師がともに関わったと考えられている。鞍作止利に代表される「止利派」は、推古朝における中心的な仏像製作者集団として飛鳥寺・法隆寺本尊を造像した点が知られているが、金銅薄板造りの馬装には彼らの関与が推定されている。特に、仏教色が強まった7世紀の金銅製毛彫馬具は、仏教美術の担い手によって製作された可能性の高い製品であり、新たな時代の息吹を映した馬具といえる。その成立初期には透かし彫文様を切り抜く技法が用いられているが、次第に線彫りが加わり、やがて線彫りだけになる。この変遷はIV期に分けられ、浅間山古墳の毛彫馬具は、II期の倭系工人による製作が始まった段階、610～630年頃に位置づけられる。

また、道上型毛彫馬具の分布は、東日本に偏っているのが特徴(図1)で、特に、古代の東山道と東海道に集中し、群馬県(上毛野)と、静岡県(駿河)から茨城県(常陸)の分布が他を圧倒している。これらは、東北へ向かう内陸道、



図1 道上型金銅製毛彫馬具の分布

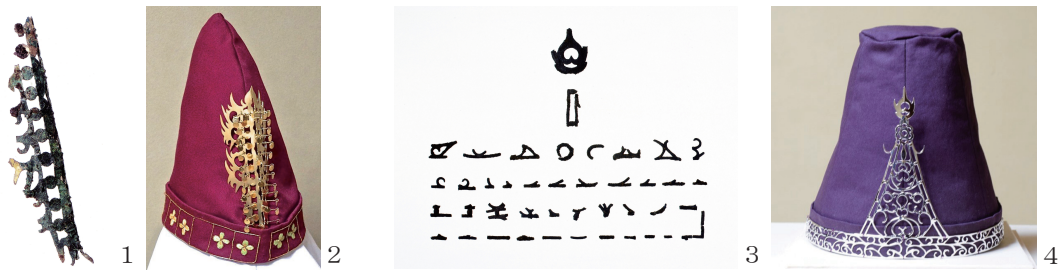


図2 浅間山古墳出土の冠飾（1・2：金銅製冠飾と復元品／3・4：銀製冠飾と復元品）

海道の要衝で、新式の道上型毛彫馬具は、東北進出を図る王権の政策に応じて、活躍した東国軍団への勲章だったのかも知れない。

2. 古墳から寺へ

一方、飛鳥時代には、律令制確立のために服飾制度が整えられつつあった。『日本書紀』推古16年（608）には、隋使の裴世清を歓迎する場面に、皇子・諸王・諸臣が皆「金髻花」を頭にさしていたという記事がみえる。髻花は、冠帽の前に飾る植物文の立飾で、『天寿国繡帳』に描かれた官人の冠帽に表現される。浅間山古墳の金銅製冠飾は、連珠文と忍冬唐草文の透かし彫りが施され、文様に沿って円形の歩揺が付く。左右対称の透かし彫り板を中央で折り曲げており、尖縁式の冠帽正面に差し込んだ立飾とみられ、髻花にあたるものであろう（図2-1・2）。推古11年（603）の冠位は、王族と蘇我氏（本宗家）を除く有力豪族が対象で、上位二位の大徳・小徳の髻花には金を用いた。地方を代表する豪族もその服飾制に組みこまれた可能性は高い。浅間山古墳の例は、それを知る手がかりになる資料といえる。また、共に出土した銀冠は、推古11年（603）の冠位制定時には廃れていた形式の帯冠である（図2-3・4）。その文様や系譜を見ると百済の冠飾や金工品の影響が濃厚で、唯一の類例が九州北部の鞍手町銀冠塚古墳（八尋1号墳）にある。王権が九州の豪族と東国の豪族に百済系の文物を威信財として配布した可能性を示しており、興味深い。

これらの「勲章」は、いずれも岩屋古墳の一代前の浅間山古墳から出土したものであるが、古墳時代も終わろうとする7世紀初めになって龍角寺古墳群の首長が飛躍した様子を物語っている。毛彫馬具を出土した古墳は、墳丘径20m

以下の小規模な円墳が大半を占めており、大型前方後円墳の浅間山古墳は、その中であって別格の存在で、東北進出を担った重要な地位にあったことは想像に難くない。

やがて、印波に瓦葺きの寺院・龍角寺が建立された。龍角寺所用瓦は、近隣2か所の瓦窯で焼かれており、そのうちの五斗蒔瓦窯跡からは1,400点を超える文字瓦が出土している。枚数を記す文字もあるが、当時の印旛沼東岸地域の地名や集団をあらわす点で注目される。

これらの文字は、瓦を製作した各地域の数量を明らかにするために書かれたもので、これらの地域が龍角寺造営を担っていたことを示している。瓦は大きくⅡ期に分けて供給されており、Ⅰ期（龍角寺の瓦葺き建物創建期前半）には、後の印旛郡域を表す「朝布」（麻生）や香取郡域を示す「加刀利」（香取）など、広域の地名が示されている。それに対してⅡ期（同後半）の地名は、後の埴生郡域内に限定されるようになる。Ⅰ期の造営では、旧来の地域的なまとまりである「印波国造」の領域で瓦を負担していたことを示し、Ⅱ期になると大化5（649）年以降に進められた「評」の分割再編成によって狭められた、「埴生評」の範囲で瓦を負担していたことが分かる。これによって、龍角寺の造営が「印波国造」の権威の誇示であった有力な手がかりを得るとともに、岩屋古墳の被葬者が龍角寺の造営主体者であった可能性がきわめて高いことを確認できる。

参考文献

- 猪熊兼勝ほか1987『万葉の衣食住』飛鳥資料館
 白井久美子2016『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』新泉社
 吉村武彦ほか編2009『房総と古代王権』高志書院

龍角寺出土土器の年代 — 印旛郡の紀年銘墨書土器との比較を中心に —

高橋 亘・横溝 優（1） 高林 奎史・梶原 悠渡（2）

（1）早稲田大学大学院文学研究科 （2）早稲田大学文学部

1. 龍角寺出土土器の概要

早稲田大学の龍角寺Ⅱ期3次調査では、多量の土器が出土した。縄文・弥生土器はほとんどみられないものの、AMS年代測定（城倉ほか2017）やその形態から6世紀前半と推測される古墳時代土師器が住居SI1520から出土したほか、中世土坑SK1508やその上層から常滑焼の大甕を含む、中・近世陶磁器が出土した。

本調査で最も多く出土したのは古代の土師器・須恵器であり、その大半は廃棄土坑SK1501で検出された。SK1501は、埋土にレンズ状堆積が認められなかったほか、完形の土師器・須恵器が多く出土したことなどから、一括廃棄土坑と考えられる。また、出土した土師器・須恵器のほとんどが坏であり、多くに灯明の痕跡がみられる点が特徴である。

本発表は、出土土器のうち、廃棄土坑SK1501出土土器群の年代的な位置づけを行うことを目的とする。

2. 対象と方法

SK1501出土の土師器には、非ロクロ土師器も含まれるが、後述の定点年代資料には非ロクロ土師器が含まれない為、本発表ではロクロ土師器と須恵器を分析対象とする。

龍角寺が位置する印旛周辺では、長文墨書土器の出土例が多く見られる。特に紀年銘墨書土器は、印旛地域の定点年代資料として、SK1501出土土器群の年代決定の参考となる。具体的には、表1のとおりである。本発表に当たって、龍角寺SK1501出土のロクロ土師器坏・須恵器坏43点と、表1の定点年代資料を中心とした

土器群28点（①と共伴する土師器坏と須恵器坏、②の土師器坏・共伴する土師器坏、④の土師器坏・共伴する土師器坏、⑤の土師器坏、⑥の土師器坏・共伴する土師器坏と須恵器坏）の三次元データを、Creaform社Handy Scanを用いて取得した。スキャン解像度0.2mmで計測し、付属ソフトウェアVX Modelを用いて整列と断面の作成を行った。

作成した断面データを用いて、底径と口径を計測し、それぞれの口径底径比（口径÷底径）と口径器高比（口径÷器高）を算出した。なお、定点年代資料共伴土器のうち、スキャンできなかった資料については報告書（千葉県文化財センター1999、八千代市遺跡調査会2004・2005）記載の法量を用いて計算を行った。算出した数値は、最小値・最大値・平均値を定点年代順に、ロクロ土師器については表2、須恵器については表3に示した。

表1 印旛周辺の紀年銘墨書土器

No.	遺跡	器種	定点年代	墨書
①	印西市 池ノ下遺跡 3号住居	土師器 小型甕	延暦2年 (783年)	「下総国埴生郡酢取郷車 持口／口曆二年正月 十四日」
②	八千代市 上谷遺跡 A116住居	土師器 坏	延暦10年 (791年)	「物部真依口／延暦十 年十一月七」
③	八千代市 上谷遺跡 A193住居	土師器 甕	延暦10年 (791年)	「下総国印旛郡村神郷丈 部口刀自咩咩代進上延 暦十年十月二十二日」
④	印西市 鳴神山遺跡Ⅱ 004号住居	土師器 坏	弘仁9年 (818年)	「口弘弘仁九年九月 廿」
⑤	八千代市 上谷遺跡 A226住居	土師器 坏	弘仁12年 (821年)	「廣友進召代弘仁十二年 十二月」
⑥	八千代市 上谷遺跡 A036住居	土師器 坏	承和2年 (835年)	「承和二年十八日進」

表2 定点年代資料の器形変化（ロクロ土師器）

遺跡	定点年代資料	層位	対象遺物	口径÷底径 (平均)	口径÷器高 (平均)
池ノ下遺跡 3号住居	土師器小型甕 延暦2(783)年	上層	定点資料 相伴土器	1.743~2.000 (1.858)	2.609~3.200 (2.985)
上谷遺跡 A116住居	ロクロ土師器坏 延暦10(791)年	床直	定点資料 下層土器	1.750	3.051
		覆土	定点資料	1.493	2.564
		覆土	定点資料 相伴土器	1.615~2.250 (2.043)	2.822~3.900 (3.345)
上谷遺跡 A193住居	土師器甕 延暦10(791)年	覆土	定点資料 相伴土器	1.395~1.846 (1.507)	2.250~3.588 (3.000)
鳴神山遺跡Ⅱ 004号住居	ロクロ土師器坏 弘仁9(818)年	覆土	定点資料	1.896	3.432
		覆土	定点資料 相伴土器	1.642~2.016 (1.818)	2.512~3.235 (2.980)
上谷遺跡 A226住居	ロクロ土師器坏 弘仁12(821)年	覆土	定点資料	1.894	3.500
		覆土	定点資料 相伴土器	1.685~1.934 (1.799)	2.465~3.105 (2.882)
上谷遺跡 A036住居	ロクロ土師器坏 承和2(835)年	覆土	定点資料	2.200	3.300
		覆土	定点資料 相伴土器	1.400~2.229 (1.845)	2.727~3.500 (3.083)
龍角寺 SK1501	—	—	出土土器群	1.267~2.000 (1.577)	2.286~3.421 (2.737)

3. SK1501 出土土器群の年代

定点年代資料4点の口径底径比を見ると、上谷遺跡A116号住居から順番に1.493、1.896、1.894、2.200と徐々に数値が大きくなる傾向が見て取れる。また、口径器高比については2.564、3.432、3.500、3.300となっている。つまり、口径に対して底径が小さくなる方向に器形が変化していることが分かる。定点年代資料は全て住居内覆土から出土しているため、定点年代資料相伴土器は時期差や年代幅を持っていると考えられる。特に、池ノ下遺跡3号住居上層、上谷遺跡A116号住居覆土については、出土状況等を鑑みると、かなり時期差・年代幅を持っていると推測でき、それぞれの数値も少し大きくなっているが、その他の相伴土器群の口径底径比・口径器高比をみると概ね定点年代資料と同様の傾向がうかがえる。

以上を総合すると、ロクロ土師器の底径口径比(平均)は8世紀代では1.4~1.8前後の数値を示し、9世紀代に入ると1.8~2.2前後の値を示す。口径器高比(平均)は年代ごとの傾向は見え、全体として2.5~3.5の値を示す。

定点年代資料と相伴する須恵器坏の口径底径比(平均)は、池ノ下3号住居下層から順に、1.570、1.689、1.910、1.794、1.815と徐々に大きくなり、口径器高比(平均)は、3.612、3.571、3.125、3.158、3.281と徐々に小さくなる。つまり、口径に対して底径が小さくなる一方で、口径に対して器高が高くなる方向で器

表3 定点年代資料の器形変化（須恵器）

遺跡	定点年代資料	層位	対象遺物	口径÷底径 (平均)	口径÷器高 (平均)
池ノ下遺跡 3号住居	土師器小型甕 延暦2(783)年	下層	定点資料 下層土器	1.461~1.702 (1.570)	3.410~3.939 (3.612)
上谷遺跡 A116住居	ロクロ土師器坏 延暦10(791)年	床直	定点資料	1.689	3.571
		覆土	定点資料 相伴土器	1.861~1.958 (1.910)	3.116~3.133 (3.125)
上谷遺跡 A193住居	土師器甕 延暦10(791)年	覆土	定点資料 相伴土器	1.614~2.077 (1.794)	2.881~3.784 (3.158)
上谷遺跡 A226住居	ロクロ土師器坏 弘仁12(821)年	覆土	定点資料 相伴土器	1.724~1.953 (1.815)	3.047~3.571 (3.281)
龍角寺 SK1501	—	—	出土土器群	1.619~1.920 (1.784)	2.667~3.302 (3.035)

形が変化している。ロクロ土師器同様、上谷遺跡A116号住居覆土の出土状況を鑑みると、口径底径比(平均)は8世紀代は1.5~1.7前後であり、9世紀代に入ると1.8前後であることが分かる。また口径器高比(平均)は、8世紀代は3.6~3.1の間で徐々に減少していくが、9世紀代に入ると3.2と少し増加する傾向がみとれる。

底部調整なども参考にしつつ、龍角寺SK1501出土のロクロ土師器坏・須恵器坏の口径底径比・口径器高比それぞれの平均値と、定点年代資料の口径底径比・口径器高比を比較して考えると、当土器群の年代は、8世紀後半であり、SK1501への廃棄年代は、鳴神山遺跡Ⅱ004号住居以前かつ上谷遺跡A116住居以降の8世紀末頃、下総国府編年(市川市教育委員会2001)の3a期後半と結論付けられる。

引用文献

市川市教育委員会 2001『下総国府跡』
 城倉正祥・ナワビ矢麻・渡邊 玲・青笹基史 2017「下総龍角寺の発掘(Ⅱ期3次)調査—遺構編—」『プロジェクト研究』12
 千葉県文化財センター 1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ—印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡—』
 八千代市遺跡調査会 2004『千葉県八千代市上谷遺跡—第4分冊—』
 八千代市遺跡調査会 2005『千葉県八千代市上谷遺跡—第5分冊—』

表出典

表1~3 取得データ及び各報告書掲載データを基に発表者ら作成。

谷川 遼

早稲田大学會津八一記念博物館

はじめに

龍角寺Ⅱ期3次調査では金堂北側（第1トレンチ）と西側（第2トレンチ）を発掘した。本報告では、Ⅱ期3次調査で出土した一枚づくり平瓦の分類案と概要を提示し、瓦からみた各遺構の上限年代を検討する。

1. 既往研究

龍角寺出土瓦は、出土軒丸瓦が大和・山田寺と類似した文様構成をとること（関野1932・廣岡1933）や、印旛沼周辺の廃寺で類似文様の軒丸瓦が出土する点（服部1932・廣岡1933）で古くから注目されてきた。また、龍角寺で出土する「朝布」（麻生）や「加刀利」（香取）といった地名を刻んだ文字瓦は、東国における7世紀の文字資料として重要である（山路2000など）。

1947年以降、早稲田大学による龍角寺境内の4回に渡る調査（Ⅰ期）が実施されるが、未報告であり出土瓦の様相は不明である。そのため龍角寺の瓦研究は、龍角寺供給瓦窯である五斗蒔瓦窯や龍角寺瓦窯の調査出土資料の検討により進展し、表のように瓦と瓦窯の変遷が整理されている（清地2009・山路2014）。

ただし、龍角寺に関わる一枚づくり平瓦となると、龍角寺所蔵の縄叩き一枚づくり平瓦および龍角寺供給瓦窯と推定される北羽鳥瓦作瓦窯（未発掘）で製作された可能性が指摘される（山路2014）のみであった。

2. Ⅱ期3次調査出土の一枚づくり平瓦

平瓦の製作技法には「桶巻づくり」と「一枚づくり」が存在する。「桶巻づくり」による平

表 瓦と瓦窯の変遷（清地2009・山路2014を改変）

五斗蒔瓦窯					時期	龍角寺瓦窯				
平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦	軒丸瓦		軒平瓦	丸瓦	平瓦		
Ⅰ	Ⅰ	ⅠA	出土	a 段階	Ⅰ期前半	a 段階				
				b 段階		b 段階				
Ⅱ	Ⅰ	ⅠB・ⅠC	出土	c 1 段階	Ⅰ期後半	c 1 段階	出土	ⅠB・ⅠC・ⅠD・ⅠE	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	
				c 2 段階		c 2 段階				
				c 3 段階		c 3 段階				
Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ		c 4 段階	Ⅱ期	c 4 段階				

瓦の製作は、古代中国に始まり、韓半島を経て日本に伝わった。一方、「一枚づくり」による平瓦の製作は平城京の造営に伴って開始する。関東では例外もあるが、国分寺造営前後、すなわち8世紀中頃から使用される技法である。本調査では両者ともに出土しており、桶巻づくり平瓦をⅠ群、一枚づくり平瓦をⅡ群として大別した。

本調査で、Ⅱ群平瓦は出土平瓦全体（約200kg）のうち約40%（約80kg）出土した。これらは以

下のように細分できる。

Ⅱa. 縄叩き

Ⅱb. 凸面を木材によって調整

Ⅱc. 凹凸面に離れ砂、糸切痕が明瞭

Ⅱd. 凹凸面を黒色に^{いぶ}燻し加工

以下、各分類の概要を説明する。

- a. SX1502、SX1505、SX1507などから出土（約20kg）。縄の太細などで細分可能である。下総国分寺や長熊廃寺出土の縄叩きの一枚づくり平瓦との比較が必要である。
- b. SK1501、SX1502などから出土（約14kg）。凸面を板材で調整した際の痕跡である刷毛目が残る。胎土に雲母を含む点が特徴的である。製作年代は不明であるが、SK1501は一括廃棄土坑であり、出土土器の年代から8世紀末の年代が与えられている。また、特徴的な調整痕跡を残す瓦群であるため、他遺跡での類例を探す必要がある。
- c. 第1・2トレンチ表土やSK1508、SM1522などから出土（約22kg）。凹凸面に粘土塊から粘土板を切り出す際の痕跡である糸切痕が明瞭に残る。また凹凸面に瓦を成形する台から瓦を剥がしやすくするために使用する離れ砂の痕跡が目立つ。本瓦群は、中世に製作されたと推測できるが、Ⅱ期3次調査では伴う軒瓦が出土していないため正確な年代は不明である。
- d. 第1・2トレンチ表土、SM1522から少量出土。いわゆる燻し瓦である。燻し瓦は一般的に16世紀後半から製作されるため、本瓦群も16世紀後半以降の製品であろう。

3. 瓦からみた各遺構の上限年代

それでは本調査で検出した、主な遺構の上限年代を平瓦から検討する。

- SX1504：柱もしくは礎石の抜取穴の可能性が指摘されている（城倉ほか2017）。一枚づくり平瓦は出土せず、桶巻づくり平瓦（Ⅰ群）のみ出土。7世紀後半以降。
- SX1505：柱もしくは礎石抜取穴の可能性あり。Ⅰ群・Ⅱa・Ⅱbが出土。8世紀末以降。
- SX1506：柱もしくは礎石抜取穴の可能性あり。

瓦の出土なし。

- SX1507：柱もしくは礎石抜取穴の可能性あり。Ⅱa・Ⅱbが出土。8世紀末以降。
- SK1508：中世の土坑。Ⅱa・Ⅱcが出土。中世以降。なお、本土坑からは明銭が出土している。
- SM1512：基壇の掘込地業。桶巻づくり平瓦（Ⅰ群）のみ出土。7世紀後半以降。なお、Ⅰ群平瓦は平行叩きである。
- SM1513：基壇の掘込地業。SM1512の下層に位置する。瓦の出土なし。
- SD1521：SM1522造成に伴う大規模掘削の痕跡か。Ⅰ群・Ⅱa・Ⅱcが出土。中世以降。
- SM1522：近世住職墓造成に伴う盛土の可能性が高い。Ⅰ群・Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdが出土。16世紀後半以降。

おわりに

Ⅱ期3次調査で出土した一枚づくり平瓦の検討を中心に、龍角寺の古代～近世にいたる瓦を概観した。龍角寺縁起に記される通り（田中1938）、龍角寺の歴史は幾度もの火災とそこからの復興である。また、中世は金沢称名寺との関係、近世は東叡山寛永寺との関係など他寺院との関わりも深い。今後も古代～近世の長いスパンで龍角寺と地域の関係性を考究する必要がある。

引用文献

- 城倉正祥ほか2017「下総龍角寺の発掘（Ⅱ期3次）調査—遺構編—」『プロジェクト研究』12
- 清地良太2009「龍角寺文字瓦の造瓦技法」『房総と古代王権』高志書院
- 関野 貞1932「龍角寺銅造薬師如来像及古瓦片」『歴史教育』7-4
- 田中喜作1938「龍角寺縁起（公刊）」『美術研究』81
- 服部勝吉1932「龍角寺塔心礎と古瓦」『寶雲』4
- 廣岡城泉1933「下総龍角寺」『新更』4-1
- 山路直充2000「下総龍角寺」『文字瓦と考古学』日本考古学協会第66回総会
- 山路直充2014「瓦の編年」『古代学研究所紀要』22

小岩 正樹

早稲田大学理工学術院

はじめに

近世における龍角寺は、元禄に再建された金堂をはじめ、仁王門、鐘楼、二荒神社や龍神宮を主とする境内社があり、古代とは様相を異にした寺観が整えられていた。いずれの建築も現存していないが、文献史料としては「大縁起」「略縁起」のほか、寺院明細帳や龍角寺村の明和9年（1772）と明治5年（1872）の明細帳に記され、遺構としては基壇や礎石が現存し、実在が認められるものである。

1. 金堂（写真1）

近世の金堂は、前金堂が元禄5年（1692）に罹災したことを受け、元禄11年（1698）に建立された。昭和25年（1950）に倒壊の危険のため解体されたが、基壇や柱礎石、昭和に撮影された古写真、保管されている解体部材から、ここでは復元を試みる。

建築概要としては、桁行五間梁行五間の南面する五間四方堂であり、正面に一間の向拝があり、入母屋屋根の平入り、銅板葺となる。

平面については、正面にあたる桁行五間は中の間から脇間、隅間へとやや柱間を小さくする。ただし向拝柱間は堂の中の間よりも広く、そのため堂の正面から渡された海老虹梁は向拝柱に載らず、水引虹梁の背面に掛かることとなる。梁間方向も各柱間寸法に大きな相違をつくらないようにされ、全体としては5丈四方ほどの正方形平面が推定される。間取りは、奥行五間のうち、表側二間を外陣とし、奥に内陣と脇陣を設けた。外陣の見上げを写した古写真からは、二間梁の大虹梁を渡し、上に結綿のある大瓶束

を載せ、東頂部から海老虹梁を掛けたことが知られ、禅宗様との折衷が認められる。内陣では、正面より第五間目の中央あたりに礎石があり、これを来迎壁として、後戸の空間が狭かったと推測される。ここに須弥壇を設け、厨子と本尊を安置したのであろう。

柱は、向拝柱こそ几帳面取りの角柱ながら、全体に丸柱を用いたと思われる。長押を打つが、柱には粽があり、台輪を載せ、禅宗様の要素を持つ。組物は三手先とし、肘木の繰りや尾垂木の形状に禅宗様が見られるが、詰組とせず、側廻りの中備は臺股とする。屋根は、軒反りを強くし、妻面も大きく、二重虹梁に臺股と大瓶束を置く。

柱間装置は、側廻り正面では中の間を両折棧唐戸とするが、ほか四間を半葺とするのはやや珍しい。側面は、前から順に、第一間を連子窓、第二間を両折棧唐戸、第三間を腰より上を引戸とする窓（後世の改変か）、第四間を板嵌に高窓、第五間を板嵌としている。

彫物は随所に見られ、軒支輪板も彫刻板とする。ただし、臺股や外陣大虹梁の眉、若葉など



写真1 昭和7年撮影の金堂

(千葉県栄町所蔵・提供)

からは過飾に至らない元禄の風潮が見られる。

以上を要するに、復元される金堂は、禅宗様の要素を意匠として積極的に取り入れ、彫刻の適用も含め、多くの参詣者への応答とした意欲的な建築であったと考えられよう。

2. 旧二荒神社本殿（写真2）

龍角寺境内の旧二荒神社本殿は、平成2年（1990）に現在の社殿に造替されたが、旧社殿は寛文8年（1668）の建立であることが、解体された部材の墨書から判明している。当社の成立には、天台宗および徳川幕府の影響を強く受けていることが知られるが、いずれにせよ当社の存在を示すもっとも古い記録は、部材の墨書すなわち旧社殿の建築となる。

旧社殿は三間社流造りであり、組物は平三斗（隅は出三斗）に実肘木付き、鉄板葺、向拝には浜縁を設けていた。大正以前は茅葺きであったとされ、かつては全体に弁柄塗りが施されたと考えられるが、そのほか大きく改変された箇所は見当たらない。中備は藁股が三箇所配され、頭貫の木鼻や組物の拳鼻、向拝の海老虹梁、水引虹梁、妻の懸魚などに装飾は見られるものの、全体としては控えめな意匠と言えよう。

この旧社殿において特徴的であるのは、建立年と工匠名が記された部材の墨書きである。主に実肘木上端に見られ、「大工」増淵伊兵衛守勝のほか「小工」「木引」の名が確認でき、いずれも常陸国下館市野辺村出身であるという。増淵伊兵衛は安食村に居を構えており、移住大工と言えよう。なお、墨書に増淵伊兵衛の名は複数見られ、筆が異なり、「守勝」と「勝守」



写真2 旧二荒神社本殿

（千葉県栄町教育委員会 1991・第5図）

が併存するため、組織的に記されたと思われる。ほかに墨書に登場する人物には、龍角寺村領主であった佐倉藩主松平乗久や、「龍角寺弟子玄榮」、「大門善十郎よりきしん（寄進）」とある大門地区住人がおり、組物部材に記録を残すことを考えたのだろう。

3. 仁王門・鐘楼・龍神宮

これらは礎石のみが残り、形姿は不明であるが、仁王門と鐘楼の主軸は、元禄金堂のそれとは異なり、参道の軸線に合致する点が測量調査によって明らかにされている（城倉 2015）。

仁王門は、八つの礎石が残り、その呼称の通り仁王像を左右に安置したと推察される。また旧二荒神社の増淵伊兵衛は、部材墨書に35才の時に「楼門」を手掛けたと記し、「大縁起」では寛文2年（1662）年に全海による楼門・惣門の再建記事がある。礎石からわかる仁王門の柱間寸法は、中央間1丈1尺ほど、脇間7尺ほどであり、これを重層の楼門と考えても規模として不足する値ではない。

鐘楼は基壇の上に建ち、礎石の数から袴腰付きの楼状であったと思われる。龍神宮は浜縁付きの一間社流造りの小祠であったと思われる。

おわりに

以上、龍角寺の近世建築について、断片的ながら眺めてきた。古代とは寺観は異なるが、金堂を中心に主軸を大きく変えることなく、仁王門から堂前まで広く開き、向かって右手に鐘楼と簡単な手水社、金堂の脇を抜けた後面に二荒神社や龍神宮を置き、多くの参拝者を迎えたことと思われる。金堂の外陣正面が葺戸である点も、開かれた参詣を意図した表現であると思われる。近世参詣文化の隆盛が窺える。

引用文献

- 城倉正祥 2015「下総龍角寺の測量・GPR（Ⅱ期1・2次）調査とその意義」『仏教文明の転回と表現』勉誠出版
- 千葉県栄町教育委員会 1991『龍角寺境内社旧二荒神社本殿調査報告書』

川瀬 由照

早稲田大学文学学術院

龍角寺の本尊、銅造薬師如来坐像（重要文化財）は現在奉安殿と称される収蔵庫宮殿内に安置される。頸部から上の頭部のみ古く、以下は江戸時代の後補とされる。本像の形状および品質構造についてはこれまでも本像を扱う論考の中で言及されてきており（関野 1932・丸尾 1932・香取 1935・上田 1942・松山 1981 など）、最近では岩佐光晴氏による調査報告があり（岩佐 2014）、詳細に論じられている。ここでは頭部の造形と制作年に絞って言及したい。

形状は肉髻をあらわし、現状螺髪はなく、肉髻珠・白毫相の痕跡も確認できない。耳朵は欠損するが環状となっている。

銅の一鑄で、蠟型とみられる。像内より観察すると肉髻内まで中空で、頭部外形に沿って中型をつくる。銅厚は0.8cmほどで均一な厚さを保ち、鑄肌は平滑で熟練した鑄造技法がうかがえる。頭頂中央に鉄心を抜いた痕跡がみられ、抜取り後鑄掛けしている。現状、肉髻と後頭部には金の痕跡がみられる。

『龍角寺縁起』（田中 1938）によれば龍角寺の草創は和銅2年（709）に龍天女によって一夜のうちに建立されたと伝える。『龍角寺略縁起』では元禄5年（1692）12月16日に本堂が罹災、入仏供養は翌年3月6日に行われたと記す。本体が被災損傷し、体部以下が新たに造りなおされたのがこの時とされている。

本像は白鳳彫刻、東国の古代仏像を扱う場合必ず取り上げられてきたが、近年ではその鑄造技法や造形的なレベルの高さから検討をうながす意見が多い。たしかに岩佐氏の指摘にあるように型持や筭を用いずに鉄芯のみで銅厚を均一

にして鑄造する技法は手慣れており、像内の平滑な鑄肌からも高い技量が看取される。

造形の上でも白鳳彫刻の典型とは言えず、いっそう進んだ写実表現がうかがえる。本像の造形の特徴は眼とふくよかな肉付きにある。上瞼の輪郭線は二重で、うねりながら長く切れ長にあらわされ、下瞼は目頭から弧を描いてやはり長くあらわされながら目尻で上瞼に合わさる。切れ長の眼は興福寺仏頭にも見られるがこれほど長いものは少ない。さらに前頭骨の中央、眉間の中央部を窪ませており、頭骨を意識した形状がつくられており、頬の膨らみも白鳳仏にみられる単純な曲面であらわすのではなく、こめかみや口唇左右の凹部からの盛り上がりによって造形されている。

また稜線の立った鼻筋と小鼻の表現は深大寺釈迦如来像など白鳳期の特徴がみられるが、興福寺仏頭と同じく口唇の表現は自然で現実的な造形となっている。耳の表現も類例中興福寺仏頭に最も形状が似通っており、鎬だつて明瞭な形をあらわす対耳輪や耳輪の巻き込みの形状も近似する。龍角寺出土の最も古い瓦は山田寺で製作された瓦を祖型としていると指摘されているが、本像にもそうした影響があるといえる。ただ遊離部の大半が欠損しているものの、丸みをもった耳朵は興福寺仏頭や法隆寺夢違観音像、新薬師寺香薬師像の平板な形状とは異なる進んだ造形である。

すでに指摘されているように面長でふくよかな顎に、顎の括りを表す点は奈良薬師寺金堂三尊像に共通しており（岩井 2015）、本像の顎の造形は薬師寺金堂三尊像に近いといえる。鑄造

技法をも勘案すれば興福寺仏頭以後、薬師寺金堂三尊像制作の前後に本像が位置すると考えられ、早くとも7世紀最末期から8世紀初頭に制作時期を定めるべきで天平彫刻と評しうる。ただ正面から側面への造形に自然さを欠く点もあり慎重に検討すべきである。縁起にいう和銅2年(709)龍角寺建立はそのままに信ずることはできないものの本像造像の目安として評価したい。久野健氏は早くにこの和銅2年創建を何らかの古記によったものとの想定をしている(久野1964)。久野氏の想定は本像の制作地を当地とし、中央からの作風の伝播に時間差をみている。本発表ではそうした時間差を考慮する必要はないと考えている。

出土瓦から当寺の創建時期(山路1999・2013)とは齟齬をきたすが、当初安置堂宇の検討や発掘調査や伽藍との総合的な考察を深める必要がある。

当初部分が残るのは頭部のみであるが等身像の古代金銅仏の遺例は少なく、彫像にとってもっとも重要な部位が残り、かつ優れた出来栄の如来像として貴重である。制作場所はその技法的に奈良で行われた可能性も高いが、当地に安置すべく制作されたことは疑う余地がなく、東日本を代表する古代金銅仏といえる。

引用文献

- 岩井共二 2015 「薬師如来坐像 一軀」『開館120年記念特別展 白鳳—花ひらく仏教美術—』奈良国立博物館
- 岩佐光晴 2014 「薬師如来像一軀」『東国の仏像三 生身と靈驗—宗教的意味を踏まえた仏像の基礎的調査研究—』東北大学東洋・日本美術史研究室
- 上田三平 1942 『下総国龍角寺の新研究』龍角寺本坊
- 香取秀真 1935 「龍角寺の薬師銅像」『美術研究』37
- 関野 貞 1932 「龍角寺銅造薬師如来像及古瓦片」『歴史教育』714
- 田中喜作 1938 「龍角寺縁起解題・龍角寺縁起(公刊)」『美術研究』81
- 久野 健 1964 「関東古代彫刻史論」『関東彫刻の研究』学生社
- 松山鉄夫 1981 「龍角寺銅造薬師如来像について」『佛

教藝術』135

丸尾彰三郎 1932 「龍角寺薬師如来像」『宝雲』3

山路直充 1999 「東日本の飛鳥・白鳳時代の瓦について—下総龍角寺と尾張元興寺—」『飛鳥・白鳳の瓦と土器—年代論—』古代土器研究会

山路直充 2013 「龍角寺創建の年代」『古墳から寺院へ—関東の7世紀を考える—』六一書房

肥田 路美

早稲田大学文学学術院

2015年の龍角寺の発掘で、埴仏が一点出土した(図1)(城倉ほか2017)。蓮華座を踏む立像の脚部片だが、底面と両側面が平滑であり、像の右側に天衣が垂下する図様が確認できる点から、独尊の菩薩立像埴仏とわかる。この龍角寺出土埴仏の図様・技法・製作年代・用途について考察し、その位置づけを試みる。

埴仏とは、凹形の範で粘土を型取りして成形した半肉彫りの仏像をいう。古代インド以来各地で製作され、既存の埴仏をもとにした「踏返し」も行われた。範と粘土があれば特別な技術も要らず、簡便に同形の仏像を複製することができ、図像の改変も容易である点が、埴仏の特徴である。新しい仏像の様式や図像を摂取習得し、地方へ拡散するに当たって、埴仏は格好の媒体だった。

用途は、念持仏・護符・参拝の記念品・寺院への奉獻など信者たちの信仰活動のほか、仏塔や厨子の壁面に貼り並べて荘厳したり、仏塔内に法頌舍利として籠めることもあった。仏像を多数作って功德を積むことを目的に、日課として製作した場合もあったようだ(肥田2011)。

日本では白鳳～8世紀前半頃が埴仏の盛期



○早稲田大学

図1 龍角寺出土の埴仏

だったとみられ、畿内を中心に全国約150カ所(森本2013)で出土しているが、関東・東北ではごく限られる。また、約360点以上出土した奈良県山田寺では、図像や状態の特徴から壁面荘厳に使用したと推測できる一方、龍角寺をはじめ大多数の遺跡では一個体しか見つかっておらず、明らかに用途が異なる(清水1995)。

龍角寺出土埴仏は、残高5cm、幅7.5cm、最大厚2cm。菩薩像は裙を正面で打合せて短めに着け、衣端を細かく波打たせる。蓮肉の縁の雄蕊を僅かな段差で表すなど、図様は精細である。当時は像の周囲と裏面に白土による下地が施されていたとみられ、像と蓮華座には金箔を貼っていた点を確認された。尊像を引き立てる手法や、一点のみの出土である点から、厨子などに奉安して礼拝像としたものと考えられる。



図2 結城廃寺出土の観音菩薩立像埴仏

(龍角寺出土埴仏断片：右下と図像が一致)

本破片の全体の図像を復元するのに最も重要な資料が、結城廃寺から出土（[結城市教育委員会 1999](#)）した観音菩薩立像塼仏である。足首以下を欠いているが、右前に合わせた裙の衣端が両脚間や左脚の外側で作る波状の襷は、龍角寺塼仏と全く一致し、左脛の衣文の位置や形状も両者ほぼ同じと見てよい。龍角寺塼仏では左脚がわずかに遊脚のように見えるが、果たして結城廃寺像は明瞭に腰を右に捻って左膝を軽く曲げた三曲の体勢をとる。同じ下総国に所在した両寺の塼仏が同原型資料である可能性は、非常に高いのではないかと（[図 2](#)）。ただし、結城廃寺塼仏は、薄手で図像部分だけに粘土を詰めたとあり、箱範による龍角寺像の方が本格的な作りである点から、龍角寺塼仏が先行し、結城廃寺は範を再利用した可能性がある。

製作年代については、この観音立像を、甲午年（694）銘をもつ基準作例である夏見廃寺等出土大型多尊塼仏の中の観音立像と比較すると（完存例が無いので、同原型の押出仏である法隆寺献納宝物の阿弥陀五尊像による）、体軀の捻りや肉付きの表現が格段に進んでおり、そうした体勢や裙裾の表現が薬師寺金堂日光・月光菩薩像に類似する点から、8世紀前半に下ると考えて良からう。

前述の通り、龍角寺出土塼仏は両側面と底面が平滑で、独尊像の範で作られた点は明らかである。観音菩薩は単独で信仰の対象とされるので、独尊の観音像は飛鳥時代から数多く製作された。しかし、同原型資料と見られる結城廃寺出土観音菩薩塼仏は、これと左右対称の体勢の勢至菩薩塼仏と一対を成し、法量の釣り合う説法印の阿弥陀如来坐像塼仏も複数体出土している点から、個々に製作した塼仏を組み合わせて阿弥陀三尊像を構成したと考えられる（[図 3](#)）。

パーツに分けて作った塼仏を組み合わせる手法は、大阪府枚方市の百済寺址出土の大型多尊塼仏でも確認できる（[中東 2015](#)）。結城廃寺では、法隆寺所蔵の銅板鑄出如来三尊像と同原型資料（[結城市教育委員会 1999](#)）でありながら、中尊と脇侍を別々に作った塼仏が見つかっており、これも組み合わせて用いられたものだろう。



図 3 結城廃寺出土塼仏の阿弥陀三尊像

結城廃寺出土塼仏における上述の状況は、より本格的な作りである龍角寺塼仏の段階で既に、個別の独尊塼仏がセットになって三尊を構成する方式が成立していた可能性を示唆する。

こうした図像はどこで成立したのか。結城阿弥陀三尊像の中尊を例にとれば、頭部を螺髪とする点、第一指と第三指を捻ずる点、偏袒右肩の大衣の内に偏衫をつけ腹部に紐帯の結び目を見せる点、両足裏とも衣で覆う点は、いずれも7・8世紀の仏像に例があるものの、塼仏としては稀有な図像的特徴で、確かな手本がなくては作り得ない。これら地方で出土する塼仏の原型は、8世紀前半の中央で作られ、範がこの地に齎されたという推測が、最も妥当だろう。

引用文献

- 清水昭博 1995 「出土状況からみた塼仏用法の検討」『考古学論攷』19 pp. 84-107
- 城倉正祥・降幡順子・ナワビ矢麻・福岡佑斗 2017 「下総龍角寺（Ⅱ期3次調査）出土の塼仏」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62 pp. 469-483
- 中東洋行 2015 「河内百済寺跡出土塼仏雑考」『特別史跡百済寺跡』枚方市教育委員会 pp. 441-464
- 肥田路美 2011 『初唐仏教美術の研究』中央公論美術出版 pp. 78-84
- 森本貴文 2013 「日本の塼仏集成」『東アジア瓦研究』3 pp. 63-76
- 結城市教育委員会 1999 『茨城県結城市 結城廃寺』

図出典

図 2・3 （結城市教育委員会 1999）PL48・口絵 2

水野 智亮

栄町教育委員会

はじめに

龍角寺の文化財について、これまでの指定経緯をおさえつつ、保存・活用の現状を紹介し、課題を整理した上で、今後の計画に資する具体的なアイデアを提示したい。

1. 龍角寺の文化財

龍角寺では、現在、国指定重要文化財の薬師如来坐像、国指定史跡の塔趾、県指定文化財の出土遺物（創建期の瓦および鎌倉時代初期の銅製経筒など）が、文化財に指定されている。

また、龍角寺に関する近世の古文書類が、龍角寺区有文書として残され、2019年に町指定文化財に指定された。

この他に、指定が今後望まれる文化財としては、薬師如来坐像を安置するため近世期に製作された厨子や、昨今の早稲田大学による発掘調査によって出土した埴仏、個人蔵の小金銅仏などが挙げられる。

上記のように、保存活用すべき多くの文化財があるが、本稿では特に、昭和初期から保存への取組みがなされてきた薬師如来坐像と塔趾に焦点を当てていくこととする。

2. 文化財の保存の現状

薬師如来坐像と塔趾は1931年10月に刀根住職のもとを訪れた氏家重次郎（建築士）によって見出され（氏家1934）、1933年に薬師如来坐像が国宝に、塔趾が国史跡に指定された。

保存施設の整備は、国史跡に指定されて間もなく、まず塔趾において着手される。1933年10月に文部大臣より奨励金が下付され、保存

施設（石柵）が翌年5月に竣工し、一方の薬師如来坐像の保存施設は戦後になって建設された。1950年3月に、安食町・安食町龍角寺国宝保存会によって寄進が募られ、同年5月に起工、翌年3月に保安殿（現：奉安殿）として竣工した。なおこの間1950年5月に、文化財保護法が制定され、同法の規定により同年8月に薬師如来坐像は重要文化財に指定されている。

1990年に、奉安殿の老朽化から、国庫補助を活用し、新たに収蔵庫の建造を計画したが、諸所の事情により、頓挫してしまう。

その後、2011年3月に東日本大震災が発生し、龍角寺の境内では、塔趾保存施設の石囲い部分が一部崩落、奉安殿には内部に亀裂が走るなどの被害が出た。

震災に先立つ2009年に龍角寺創建1300年記念事業が執り行われており、記念事業の発起人をはじめとする檀家総代や、栄町観光協会が中心となり、2012年7月に龍角寺復興委員会が立ち上がる。

現在も薬師如来坐像と塔趾の保存施設は震災の爪痕が残ったままの状況であるが、地区では、龍角寺境内の清掃作業が月1回（毎月第2日曜日）行われ、塔趾や奉安殿の周りも含めた境内全体の美観が保たれている。

また、薬師如来坐像の光背と台座が、震災によって毀損していたが、2013年度に国庫補助を活用し、修理が行われた。

3. 文化財の活用の現状

薬師如来坐像は、お寺の仏事として、お盆やお正月に御開帳がある他、教育委員会事業とし

て、毎年11月3日（文化の日）と、春（3月末～4月初め）の岩屋古墳公開事業、そして町内小学校の校外学習時に御開帳の機会を得ている。

栄町教育委員会では、2012年度から、町内外からボランティアを募集する「文化財サポーター制度」を開始しており、サポーターは、研修や実践を積み、公開事業や校外学習時に活躍している。

ご開帳日以外においても、主に土日祝日に、文化財サポーターの有志によるガイドが2017年から行われており、5年間で延べ4,000人以上を案内してきた。

薬師如来坐像の展示は、千葉市美術館（2013年）、奈良国立博物館（2015年）において行われており、今回の早稲田大学會津八一記念博物館企画展での公開は3回目にあたる。

また、境内には、薬師如来坐像及び塔趾の案内解説板を整備している。2008年度に成田国際空港振興協会・NAAグループの協力を得て設置したもので、2020年に英語の解説板を増設した。

4. 保存の課題

薬師如来坐像及び塔趾共に、保存施設が倒壊する危険性をはらんでいる。そのため、保存施設の改修や改築などの対応が重大な課題として残されてきた。

薬師如来坐像の奉安殿については、改修か、同地点での改築か、場所を替えての建替えか等、どの程度の施工で十分なのか、費用面も踏まえての検討が必要な段階にある。

また、塔趾の保存施設については、石囲い部分を安全な形で復元できるのか、反対に全て撤去するのか、基礎部分から新たに保存施設を設けるのかを改めて検討する必要がある。

5. 活用の課題

薬師如来坐像は普段、近世期の厨子の中に安置されている。東日本大震災を受けて、厨子が前方に傾斜し、校外学習の機会などにおいて、間近で拝観することが困難な状況にある。

塔趾の保存施設は、石囲い部分が危険な状態であることから、パーテーション（縄ロープ）の外側からの見学をお願いしている。

文化財サポーターの有志によるガイドでは、コロナ禍の感染状況によっては、活動を休止せざるを得ない場合も発生している。

6. 今後の計画に資する具体策

課題は多くある中で、保存と活用に係る計画を作成できていないのが現状である。そのため、担当者の意見に留まるものではあるが、現時点で考えている具体策を短期・中長期に分けて示したい。

まず保存面であるが、短期的には保存施設の課題と対策を整理する。中長期的にはクラウドファンディングを始めとする寄付の方法を積極的に検討することで費用面のハードルを下げ、適切な保存施設の整備につなげたい。

活用面については、短期的には、ボランティアガイド等を補うものとして、既存の解説版等からアクセスできる音声ガイドやYouTube動画を公開する。中長期的には、塔趾においてAR（拡張現実）技術を駆使した三重塔の再現や、境内全体に視野を広げ、3D測量のデータや金堂の復元図等の早稲田大学の研究成果をもとにした境内の再現など、デジタルによる活用を検討していきたい。

おわりに

龍角寺における文化財の保存および活用は、御住職の御協力のもとに行われてきた。そして、多くの課題を解決するためには、寺院と関係教育機関、地域住民との連携が重要である。文化財を保存・活用するため尽力されている方々の間の協力関係が維持され、そして、更なる関係が築かれるように、行政としての務めを果たしていきたい。

引用文献

氏家重次郎 1934 「史蹟上から見た龍角寺」『史蹟名勝天然記念物』9-10

川尻 秋生

早稲田大学文学学術院

はじめに

千葉県印旛郡栄町に所在する龍角寺は、関東では珍しい白鳳仏を有する寺院である。また、古墳時代から奈良時代にかけての遺構の変遷が近接した地域で確認された事例として、全国的に注目されてきた。

古代の東国に関する研究は数多いが、文献史料は少なく、考古学との協業が必要になる。本報告では、このような現状を鑑み、地域史研究における龍角寺の重要性について、私見を述べることにしたい。

1. 下総国埴生郡の歴史的環境

龍角寺は、古代の行政区画では下総国埴生郡に属する。郷の数は4つしかなく、郡の等級では最小の「小郡」に位置づけられる。

それにも関わらず、付近には、群集墳として著名な龍角寺古墳群、埴輪を持たない最後の前方後円墳の浅間山古墳、そして全国屈指の終末期の方墳で三段築成の岩屋古墳がある。

また、尾上遺跡は、モガリの跡かとも言われる特殊な遺構であり、麻生広ノ台遺跡からは火葬墓が検出された。(白井 2016)

そして、龍角寺が建立された。使用された瓦が、大和山田寺に酷似する八葉単弁蓮華文鏡瓦、と重弧文字瓦の組み合わせである(會津八一の提唱にしたがって、今回は軒丸瓦・軒平瓦とは表記しない)。近年では、この文様の祖型が奈良県桜井市の吉備池廃寺(百濟大寺)に溯ることが確認された(川尻 2014)。

浅間山古墳の北には、創建期の瓦を焼成した五斗蒔瓦窯址、寺の近くには、次の時期の瓦を

焼いた龍角寺瓦窯址がある。

とくに五斗蒔瓦窯から出土した文字瓦は、種類は多くはないものの、7世紀後半でも早い時期のものとしては全国的に希有のもので、近辺の地字名と対比することによって、小さな単位ごとに龍角寺の瓦を負担したと理解されている(山路 2009)。

また、大畑遺跡群は、官衙的要素を持つところから、7世紀末に営まれた埴生評(郡)家と推測されている。

このように、近接した地域に、古墳時代後期から奈良時代までの遺跡が集中的に営まれ、かつ、それぞれが特徴的な性格を持つ事例は、全国的に見ても極めて貴重である。

類例をあえて求めれば、岐阜県関市の弥勒寺官衙遺跡群程度であろうか。

2. 印波国造との関係

こうした龍角寺をめぐる歴史的環境は、古代東国史研究にとって、きわめて重要である。その理由は、乙巳の変(大化改新)の後、政府は、国造のクニを解体し、新たに評を立てるために、使者(東国国司)を派遣したことと関係する(『日本書紀』)。これは、古墳時代以来、クニを支配してきた国造の領域を解体する画期的な試みであった。地方社会では、驚天動地のできごとだっただろう(川尻 2022)。

ところが、このようすを具体的に示す史料は、『常陸国風土記』に限定される。しかも、地域の有力者が中央から派遣されてきた惣領(書紀の東国国司に当たる)にクニの分立を申請し、評が建てられることが簡単に示されているだけ

である。

古代史や考古学に関心を持つ者は、皆この時、実際に在地でどのような動きがあったのか、もどかしい思いでこの史料を眺めてきた。

しかし、このようすをうかがうことができる地域がある。それが埴生地域である。埴生郡の東隣には印旛郡があり、古墳時代前期から終末期まで継続する公津原古墳群が形成されていた。前方後方墳の船塚古墳、終末期の方墳の手黒摩賀多古墳なども存在する。郡名から推測すれば、この地が印旛国造の本拠地であろうと推測されてきた。

ところが、浅間山古墳や岩屋古墳、そして龍角寺の存在から見れば、6世紀末以降は印旛郡よりも埴生郡の方が優勢となる。考古学的にはこの地を印旛国造の本拠地と見るべきなのだ。

6世紀以降、印旛国造の内部に新興勢力が生まれ、最終的に印旛国造を凌駕し、国造職を奪ったと推測される。それが龍角寺を建立した氏族であろう。

細かい考証は省略するが、平城京から出土した木簡により、埴生郡司は大生部直と推測でき、上宮王家との関係が密接であった。6世紀末以降、この地が隆盛した背景には、ヤマト王権と直接つながることができたという大きなアドバンテージがあったと、筆者は推測している（川尻 2003）。

飛鳥時代に建立された地方寺院の多くは、終末期古墳の所在地近くに建立され、しかも突然創建される場合が多い。関東の他の例で言えば、群馬県前橋市の山王廃寺がこれに当たる。

モニュメントが古墳から寺院に移ったと同時に、ヤマト王権と直接結びつく必要があったのだろう（川尻 2014）。

それにしても、4郷しかない小郡で、古墳時代以来、これだけの規模の遺構を作り続けられた原動力、経済的な基盤は何なのだろうか。筆者にとっての最大の疑問である。

集落遺跡がある程度判明すれば、あるいは手がかりが得られるのかも知れないが、現在のところ、不明と言わざるを得ない。

あるいは、農業生産のみならず、周りを湖沼

に囲まれた立地を活かした水運などが大きく関係していたのであろうか。いずれにしても、今後に残された大きな課題であろう。

おわりに

龍角寺を含む一帯が考古学から注目されるようになって、100年ほどの時が流れた。その間にも、龍角寺古墳群は、史跡名勝記念物に指定され、房総風土記の丘資料館が設置された。その後も、遺跡の発掘や測量が頻繁に行われ、古代の埴生郡のようすがかなり鮮明にわかるようになってきた。

その結果、全国的に見ても、古墳時代後期から奈良時代までの遺跡が、狭い地域に連続して存在する遺跡群として、ますます注目されるようになっていく。

一方、個々の遺跡については、多くの研究成果が上がってきたものの、この遺跡全体をどのように歴史的景観として捉えるのかという点は、まだ課題を残しているように思われる。

近年では、遺跡の整備が着々として行われるようになってきた。こうした景観を学校教育や生涯学習にどのように活かしていくべきなのか、我々に課された大きな課題である。

なお、中世の龍角寺については、学問的拠点としての談義寺の問題がある（植野 1996）。この点は、まだ十分研究の手が及んでいないが、今後深化させるべき問題であろう。

引用文献

- 植野英夫 1996 「中世下総国埴生庄と龍角寺」『中世東国の地域権力と社会』高科書店
- 川尻秋生 2003 「大生部直と印旛国造」『古代東国史の基礎的研究』塙書房
- 川尻秋生 2014 「飛鳥・白鳳文化」『岩波講座日本歴史古代2』岩波書店
- 川尻秋生 2022 「国造の世界」『シリーズ地域の古代日本 東国と信越』KADOKAWA
- 白井久美子 2016 『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』新泉社
- 山路直充 2009 「寺の成立とその背景」『房総と古代王権』高志書院

下総龍角寺再考

—最新の発掘調査から—

副書名：早稲田文化芸術週間 2022 下総龍角寺展関連シンポジウム予稿集

編集・発行：早稲田大学會津八一記念博物館

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

早稲田大学奈良文化研究所

刊行日：2022年10月16日

印刷：能登印刷株式会社（〒101-0024 東京都千代田区神田和泉町1-7-1 扇ビル4階）
